

中古の副詞「おほかた」について

—— おほかた・おほかたに・おほかたは ——

星野佳之

はじめに

古語「おほかた（は）」に関して、意味の解釈が大きく分かれる場合がある。例えば例1についてなら、①「一般的な気持ちでいえば（月を賞美することはすまい）」（岩波新体系）のような解釈と、②「よく考えてみた結果」（小学館新全集、頭注）のような解釈である。この歌の場合は①をとる立場の方が多いようだが、②の理解は国学の時代から既にあり、中でも『かざし抄』は次のように比較的詳しく説く（注1）。

1（題しらず）

業平朝臣

おほかたは月をも賞でじこれぞこの積れば人の老いとなる物

【古今集・卷十七・雑歌上・八七九】

大かた 里『全体』又『一通り』の心もあり。肝要の物を心

にもちて、其外を指す詞なるゆゑに、こなたへかゝりあはぬといふ心も出て来る也 「大かたの」「大かたも」「大かたに」など詠めるは皆是也

大かたは 俚『ヨク／オモヒカヘシテミレバ』と言ふ。只今までも、肝心と思ふことにかゝはりて、心つかざりしに、ふと外の理までを思ひめぐらして、これまで思たる事なしたる事はよからず、只かうぞ、かうこそせめと、思ひかへしたる心也。此例『古今』『後撰』の後、をさ／＼見えず

「おほかた」（以下「おほかたゆ」の如く記す）と「おほかたは」（以下「おほかた・は」は意義的に区別され、上の①のような表現は「おほかたゆ」の役割であつて、②の方を「おほかた・は」の表すものだといふのである。

個々の歌にいずれをあてるかは別として、②の用法を「おほかた」の語に見いだすのは特に珍しい立場ではない。一例を挙

げれば日本国語大辞典が「細かいことはともかく、大づかみにいえば、の気持を表わす。言いだしや書きだしに用いることが多い。だいたい。およそ。」という項を立てるのなどもこれである。

しかし、この②のような理解を、「歌意を把みそこねているだけのこと」と全く認めないのが工藤重矩（一九八三）である。かざし抄の「おほかた・は」を含めて、「おほかたゆ」の「全体・一般」の意で解釈が可能」と言い、例えば例1について次のように述べる。

この「おほかたは」も、一般的には、一般論としては、の意である。表面的に口語訳すれば「一般論として言えば、月をも賞すまい。これがあの積り積ると人が老年となるものなのだ」となる。〈略〉そのような道理による一般論はそれとして、自分個人の気持ちでは月を賞でざるを得ないのである。道理による一般論では「月をもめでじ」だけれど、そのような理屈にかまわずに、美しい月を賞でよう、私は賞でるぞ、というのが、この歌の作者の本心である。

本稿はこの主張には従い難い。例1を、「月を愛でる」一般に対するアンチテーゼと理解しないということがこの歌の理解として成り立つのだろうかというそもその疑問は措くとして

も、歌中に明示された発見の外に、「私は賞でるぞ」といった「真意」を見いだす論法は、幾つかの例で破綻を来すように思う。例えば例2についても工藤論は「個人の現実的本心としては名はもとより惜しい」という心情を見いだす^{（注2）}のだが、例2に対するおほつぶねの返歌は「人はいさ我はなき名の惜しければ（昔も今も知らずとを言はん）」である以上、贈歌の真意を「惜しくない」と踏まえていることは動かし方がない。

2 おほつぶね物のたうびつかはしけるを、さらに聞き入れざりければ、つかはしける 貞元のみこ

おほかたはなぞや我が名の惜しからん昔のつまと人に語らむ
【後撰集・卷十・恋二・六三三】

工藤論の扱った古今集以外にも対象を広げ、例3でこの論法を用いると、「個人としては思ひ捨てない」という極めて不自然な「本心」をここにも見ることにならないだろうか。

3 観身岸額離根草、論命江頭不繫舟（三〇六）／皇太后宮うせさせ給へる御法事の物とて、いろいろの玉めしたるに、まゐらすとて（三八八）

かぎりあればいとふままにもきえぬ身をいざ大方は思ひすててん
【和泉式部集・三〇六／三八八】

この論法は、「大方はA」といった場合、歌の「真意」を非

Aとして想定するものだ。Aを反転するだけで非Aになるからその想定自体は容易であるし、大概の事は「非Aのはずはない」と論証する事が難しいから工藤論は成り立つように見える。しかし、「非A」を想定できるということとそれが意味されているということとはやはり同じではない。

とはいうものの対する『かざし抄』に代表される②の理解も、文脈にうまくあてはまるという以上の考察は従来されてこなかった。①との脈絡が説明されない②が便宜的に過ぎるように見えることはよく理解できるし、そこに疑問を呈する工藤論の「よく考えてみたら」「いっそ」と訳しても意味は通るが、語義に従ったことにはならない」という問題提起自体は正当であろう。個別の用例の解釈の際にこの語が問題になることがあり、例えば例4について日本古典全書がこの歌を②の立場で捉えることに「かく解すれば一首の意はよく通するが、かく解してよい用例がほかにあるか否かが問題である」と述べたり、新全集が「おほかたは」の解釈については諸説がある」と注意を促すのは、同様の疑義に発するのであろう。

4 山崎より神奈備の森まで送りに、人くまかりて、帰りがてにして別れ惜しみけるに、よめる
人遣りの道ならなくに大方は行き憂しといひていざかへり

なむ

【古今集・卷八・離別歌・三八八】
本稿は、結論としては後述の如く、『かざし抄』を含む大勢と同様に②の用法を認めるものだが、一方でそれを「おほかた」の語形にのみ振り分けたり、「おほかたに」のような語形も「おほかたゆ」と同じく扱うことについては、なお考察の余地があると考えて。以下、よくあてはまる訳語を考える以上の、副詞「おほかた」の中古における整理と分類を試みる^(注3)。

一

まず「おほかたゆ」と「おほかた・は」を一度分けた上で、前者の整理から始めたい。こちらについては、工藤論も『かざし抄』も意見の対立がない。「特殊に対する一般、部分に対する全般」（工藤）というのは、「肝要の物を心にもちて、其外を指す詞」（『かざし抄』）と同じ趣旨であろう。先の①である。これは確かに例5の「おほかたの秋」と「わが身」の対比などをよく説明できる。

5 (題しらず)

(よみ人しらず)

おほかたの秋くるからにわが身こそ悲しき物と思ひ知りぬれ
【古今集・卷四・秋歌上・一八五】

本稿もこのこと自体に異論はないが、「おほかたゆ」に「おほかたの」「おほかたに」（以下それぞれ、「おほかた・の」「おほかた・に」）を含めて区別しない点は工藤論・『かざし抄』ともに妥当ではないと考える。「おほかた・に」は、中古の段階では既に「おほかたゆ」と意味の分化が相当に進んでいると考えるべきである。

「おほかたゆ」の例6は宇治八の宮が娘達の存在を世間から隠す様について述べた会話。これらを宮の日頃の、つまり「一般的」態度と見ることは妥当だが、「おほかた・に」の7や8の方は一回的事態についての言及であり、当該人物の普段のあり方が述べられている訳ではない。主従関係や恋愛などの特別な関係と無縁（であるかのよう）な態度や振る舞いの様である。

6 「a 人間かぬ時は、明け暮れかくなむ遊ばせど、下人にて、都の方より参り立ちまじる人はべる時は、音もせさせたまはず。おほかた、Aかくて女たちおはしますことをば隠させたまひ、なべての人に知らせたてまつらじと思しのたまはするなり」

【源氏物語・橋姫】

7 をかしげなる侍童の姿好ましう、ことさらめきたる、指貫の裾露けげに、花の中にまじりて朝顔折りてまゐるほどなど、絵に描かまほしげなり。おほかたにうち見たてまつ

る人だに、心とめたてまつらぬはなし。

【源氏物語・夕顔】

8 むかし見ける人、こゆみをたよりにつけて、いま身づからとりにこんといひけるが、おほかたにきたれどまだ見えねば

【馬内侍集・一五三・詞書】

この「おほかた・に」については、田和真紀子（二〇〇五）が「連用修飾に用いられると、〈一般〉や〈普段〉を表す意味から〈一般的な様子〉を表す」と述べ、動詞を修飾した例については「〈特別な関心を持つていない様子〉で動作を行っている様」と記述する通りであろう（注4）。特に連用であるという指摘は、例6のような「おほかたゆ」との区別を考える際に特に重要である。こちらはもはや句中の述語用言のみと関わるのではなく、句全体に対して「一般的」という把握を示しているからだ（注5）。

その把握について、例6に即してより具体的に述べれば次のようになる。大文字Aを付した部分が八宮の娘に対する一般的姿勢、その具体例が小文字aの部分である。類例9では、供養の準備の具体的な様がa、一方のAはこれらのまとめ・総評と言った内容である。

9 年ごろ、私の御願にて書かせたてまつりたまひける法華千部、急ぎて供養じたまふ。わが御殿と思す二条院にてぞ

したまひける。a 七僧の法服など品々賜す。物の色、縫目よりはじめて、きよらなること限りなし。おほかた、A 何ごとも、いとかめしきわざどもをせられたり。

【源氏物語・御法】

次の10・11も本質的には変わらないと思うが、小異があるの
で言及しておく。10は光源氏の幼東宮についての評、11は病が
ちな朱雀帝の有様である。東宮の全体的な性質や、帝が自らの
治世に対して思う一般的考えがAであるが、しかしそれに反す
る具体的事例として小文字のbが挙げられている（10聡明で大
人びている（A）が未熟（b）、11思っていた眼は回復した（b）
が、長生きできそうには思えない（A）。ただしこれらの例に
於いてbはAに対して決して等価ではなく、無視されてよい例
外であり、大勢としてのAは結局成り立つ。

10 「おほかた、Aしたまふわざなど、いと聡おとなびた
るさまにものしたまへど、b まだいとかたなり」など、
その御ありさまも奏したまひてまかでたまふに…

【源氏物語・賢木】

11 b 時々おこりなやませたまひし御目もさわやきたまひぬ
れど、おほかたA世にえ長くあるまじう、心細きこととの
み、久しからぬことを思しつつ、常に召しありて、源氏の

君は参りたまふ。

【源氏物語・滯標】

例6・9も10・11も、具体的事例aと時にbの集まりから抽
象した一般的性質が、「おほかたφ」の表すAである。この用
法を「総合」と呼ぶことにすると、「叙述内容の内部にあって
それを詳しくする」のではなく、「叙述」に相対して状況の総
合的判断を述べる姿勢を表す、若しくはその叙述内容として状
況を総合した判断や描写が現れることを示すのであって、この
「おほかたφ」は連用副詞ではなく、工藤浩（二〇〇〇）に従
えば陳述副詞のうちの、叙法副詞に該当すると考えるべきだと思
う。

なお、「おほかたφ」の語形で「おほかた・に」の如く連用
修飾の働きをすると考えるべき例が見られないのではないのだ
が、本稿の理解では、「おほかたφ」全五二例のうち、「総合」
が四二例（八二％）に上るのに対し、次の三例（六％）に留ま
る。用法の「揺れ」と理解して反例としない。

12 おほかたこそ隔つることなく思したれ、姫宮の御方さま
の隔ては、こよなくけ遠くならはさせたまふも、ことわり
に、わづらはしければ、あながちにもまじらひ寄らず。

【源氏物語・匂兵部卿宮】

13 中納言殿には聞きたまひて、いとあへなく口惜しく、い

ま一たび心のどかにて聞こゆべかりけること多う残りたる心地して、おほかた世のありさま思ひつづけられていみじう泣いたまふ。

【源氏物語・権本】

14 …中將は、おほかたもの思はしきことのあるにや、いといたううち嘆きつつ、忍びやかに笛を吹き鳴らして、「鹿の鳴く音に」など独りごつけはひ、まことに心地なくはあらまじ。

【源氏物語・手習】^(注6)

さて、連体修飾の場合は、「おほかた・に」が表したような「特別な関係とは無縁な様」も(例15)、その場を総合した把握も(例16)、「おほかた・の」の一語形で表され、特に(例えば「おほかた・なる」などの)分化が見られるわけではない^(注7)。

15 「いとあはれに、かかる物商ひて世に経る人いかならむ」といひて泣きければ、ともの人は、「なほ、おほかたの世をあはれがる」となむ思ひける。

【大和物語・一四八】

16 …胸はふたがりて、この人を空しくしなしてんことのみじく思さるるに添へて、おほかたのむくむくしき譬へん方なし。

【源氏物語・夕顔】

以上、「おほかたゆ」「おほかた・に」「おほかた・の」の整理を試みたが^(注8)、『かざし抄』が「おほかた・は」の語形に託したところの、もともとの問題であった「よくよく思ひ返し

てみれば」なるものは上の考察によって解消しうるか。節を改めて検討したい。

二

「おほかた・は」の語形で表されるものが、「おほかた・に」の連用副詞か「おほかたゆ」の叙法副詞のように解釈できるならばとりたてて別の用法を立てる必要はない訳だが、結論から言えば否である。前掲1や3を「おほかた・に」の、「自分と特別の関わりを持たない様」で「愛でまい」「思い捨てよう」などと理解することはできない。また、「おほかたゆ」の「一般論」に解消し切れない例が残ることは前述した。やはり、「おほかた・に」でも「おほかたゆ」でもない、「ヨク／＼オモヒカヘシテミレバ」のような理解が最もしっくりくるのである。『かざし抄』の言うような「おほかた・は」の性格は、認められるべきだと思ふ。ではこれは用法として何なのか。則ち、①意味的に「おほかた・に」や「おほかたゆ」といかなる関係を持ちうるか、また②構文的に、連用副詞なのか叙法副詞なのか、或いはそれ以外なのか、という問いがたてられよう。

まず①の意味的関連は、「おほかたゆ」の「総合」との間に

見いだせる。先述の通り、「総合」は事態a群から抽象されたAと関わるのであり、それは別の言い方をすれば事態そのものから一歩離れた描写・判断が働いている訳である。とはいっても、「総合」の事態と抽象は地続きであるが、「おほかた・は」が関わる判断は事態から離れ切ってしまう。前掲2を例にとれば、「なぜや我が名の惜しからん」という判断に至る前にあったのは、「おほつぶねにものたうびつかはしける」という段階である。「更に聞き入れず」から窺える、おほつぶねに声を掛け続けた段階を踏まえて先の結論に至ったのだから、一段抽象したといつてよいかもしれないが、それ以上の事態離れを見るのがこの歌の眼目を理解することではないだろうか。声を掛けても受け入れられない、という事例の集積を総合して得られる判断は、普通には「相手は自分に気がない」等であつて、「我が名は惜しくない」ではあるまい。「総合」の「おほかた・は」が事態から一歩離れる程度とすれば、「おほかた・は」の離れ方は飛躍なのである。次の例17は、主人公の平中に一度の逢瀬で捨てられた主人にかける言葉であるが、恋に破れた女に「そもそも考えるな」というのも単なる総合・抽象を超えた忠告である。

17 この女、音をのみ泣きて、物も食はず。つかふ人など、「お

ほかたはな**おほしそ**。かくてのみやみたまふべき御身にもあらず。人には知らせでやみたまひて、ことわざをもしたまうてむ」といひけり。

【大和物語・百三】

例4について小学館・新全集が「(私も一度よく考えて、) ipp そのこと」と訳すのも、この飛躍を表現したものと理解する。また、一般には矛盾を合理的に解決することもあり得るし、問題を放擲するような飛躍のしかたもあるが、それは「おほかた・は」が表す態度ではないらしく、そういう用例は見あたらない。17の下女の忠言が恋心の放擲を促すものであるのも、それは依然思い悩む状況を解消する手段としてのものなのだ。前掲の4については、出発しなければならぬのに生じる「帰りがてにして」という逡巡を、「人遣りの道ならなくに」という口実を後押しに解消する決意が「行き憂しといひていざかへりなむ」である(註9)。こなれない言い方ではあるが、この用法については「前提の解消」と呼んでおくことにする。

こうして本稿は、「おほかた」にまつわって「総合」と「前提の解消」を区別する。「総合」の方では事態と地続きであることの現れとして、具体的事態a・b等を容易に見いだせるし、「おほかた・は」の直後には単純な描写文が多い。これに対して「おほかた・は」ではそれは稀で、矛盾的・対立的事態による逡巡を、

その前提自体を覆して解消してしまう真理や方法が、ケリの発見や「いざ…せむ」という決意表明等で語られる。「おほかたゆ」には見られない17のような禁止構文の例もあるが、こうした文の傾向の違いは当然、両用法の特徴の違いによるものである。

さて、「前提の解消」も「総合」と同様、叙述内容の内部と関わっていないことはもはや明らかで、陳述副詞のうちの叙法副詞と考えるべきであろう。「総合」との違いは、叙法副詞の

<表>			
語	用法	用例数	割合
おほかた	連用	54	100%
	[前提の解消]	7	13%
	[総合]	42	76%
	速用	3	5%
	その他※	3	5%
おほかたゆ	小計	55	100%
	[前提の解消]	22	88%
	[総合]	3	12%
	小計	25	100%

下位分類的なもので、工藤浩（二〇〇〇）は、「叙法副詞—B 認識的な叙法—（b）副次叙法—（12）習慣・確率 etc」の「大抵 大概 普段」と、「叙法副詞—D 下位叙法 sub-modality—（25）説き起こし（概括）」の「およそ そもそも 一体 大体 本来 元来 一般に 概して 総じて」を区別するが、それと同じように考えられるのである

「大概／だいたい」片付いた／「そもそも／だいたい」そういう態度がよくない」^{（注10）}

なお一部、「おほかたゆ」が「前提の解消」を表すと見られる例がある。〈表〉にまとめた通り、これらは「総合」が「おほかたゆ」全例の七六パーセント占めるのに対して一三％に留まる^{（注11）}。これらも用法の揺れと解したい。

18 （とこ）

夢ならであふことかたきよのなかはおほかたとこをおきずやあらまし

【古今和歌六帖・第二・一三八六、参照・伊勢集一八〇・ゆめならであひみむことのかたきみはおほかたとこをこひずやあらまし】

19 さとより内におくり給ひて、せちなる事ありていづるなりとありしつとめてきこえし

まちかねのさとをいでぬと思ひしをおほかたとしのなにこそありけれ

また、次は「おほかた・は」が「総合」の用法に用いられているように見える例であるが、これは「おほかたゆ」と係助詞「は」が結合したものと見てよいだろう（一般と個別の対比が文脈上明らか）。

20 おほかたは思ひすててし世なれどもあふひはなほやつみをかすべき
【源氏物語・幻】

21 「おほかたは、いとめでたき御ありさまなれど、さる筋のことにて、上のなめしと思さむなむわりなきて、大輔かむすめの語りはべりし」
【源氏物語・浮舟】

22 きこえさするほどはおほかたはまだくらくて、かつらのきのしたにいとあかくさしいりたれば

【大斎院前の御集・下巻・二九四・詞書】
これらをお例外として認めるにしても、「前提の解消」が「おほかた・は」の八八%を占める。「かざし抄」が冒頭①の意味を「おほかたゆ」に、②を「おほかた・は」に振り分けたのは、傾向を述べたものとして理解する限りは正しい。

結語

以上、「おほかた・に／の」「おほかたゆ」「おほかた・は」について整理を試みた。大まかに言って、「おほかた・に」は個別の動作に関わり、「おほかたゆ」は事態の全体をまとめ、「おほかた・は」は専ら事態に対する話者の主張を表す。この三者は少なくとも表現される内容によって区別されるし、伴う文の

種類にもある程度の偏りが見られることを述べた。よって、冒頭に引用した工藤重矩（一九八三）とは三者を区別することにおいて、『かざし抄』とは「おほかた・に／の」と「おほかたゆ」を区別することにおいて、立場を異にすることになった。「前提の解消」の用法は、似たようなものが現代語の「だいたい」にもあり、「およそ」にも同様の指摘があり（田和二〇〇七）、要は珍しいものではないのだが、用法の存在自体に疑いが生じたのは、結局現代までには消滅した用法であることが一因であろう。23のように、一文の中にもその直後にも間投的に連発されるような段階を経て中世の間には消滅し、今ではあとかたもない。

23 いかにも山の中にただ一人あたるに、人のけはひのしければ、少しいき出づる心地して見出しければ、大方やうやうやうささまなる者ども、赤き色には青き物を着、黒き色には赤き物を禪（たふさぎ）にかき、大方目一ある者あり、口なき者など、大方、いかにも言ふべきにあらぬ者ども百人ばかりひしめき集まりて、火を天の目のごとくにともして、我があたるうつほ木の前にあまはりぬ。大方いと物覚えす。

【宇治拾遺物語・巻第一・三 鬼に瘤取らるる事】（注12）

代わりに近世には「推量」とでもいうべき用法が現れて現代に至る。

24 一重 きさんじなもののだの。コウ呉葉や、また誰か筆をもつていつたこつたぞ。おふかたまた外山さんだらふ。はやく取て来や。 【傾城買・二筋道・冬の床】

「推量」用法の出現の事情は詳らかにしないが、ある程度の連関は予想してもよいだろう。すなわち推量事態なら何でもよいというのではなく（いきなり「明日はおおかた雨だろう」とは言えない）、「大方そんなことだろう」というように、原因を付度して納得するような文脈によく馴染む。古代の「おほかた」は眼前の事態をそもそも生じさせないような事柄に目を向けるが、その前提には原因の把握があるはずで、「推量」用法は「前提の解消」の一端を伝えるように思うのである。

注1 古典全書（大方にはめでじ。特によく賞しておかう。）、岩波大系（たいていのところでは、わたしは、人の賞美する月だつて賞美すまい。）、新潮集成（まあ、たいがいの折には、月を賞でるなどということはしないにかぎる。）はいずれも①。また新全集も口語訳は「一般的には、私は人の愛でる月だつて愛でることはすまい。」と①に属し、頭

注と齟齬がある。

2 「逢瀬に悩む者の一般的立場からすれば、我が評判も全く惜しくはない、の意である。〈略〉「名」はどうして惜しいことがあるう。しかし、それは一般論、実際、個人の現実の本心としては名はもとより惜しいのである。だから、できれば評判を立てないであいたい。だが、もし、あなたが逢わないと拒み続けるなら、あの女は私の昔の妻だと噂を立てますよ、我名はおしむべきものとはいえ、一般論としては逢ふにしかへば惜しからなくなのだから、これも半ばはおどし半ばは哀願である。」

3 用例は次の作品から一三四例を得、引用の本文も次に依った。

伊勢物語（新潮日本古典文学集成）／大和物語・平中物語・源氏物語（以上、新編日本古典文学全集）／土佐日記・枕草子・古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載集・新古今和歌集（以上、新日本古典文学大系）／古今和歌六帖・後葉和歌集・赤人集・伊勢集・是則集・仲文集・元真集・斎宮女御集・元輔集・能宣集・重之集・一条摂政御集・義孝集・小馬命婦集・兼澄集・好忠集・千頼集・道信集・

馬内侍集・為頼集・実方集・嘉言集・大式高遠集・紫式部集・和泉式部集・和泉式部続集・大斎院前の御集・輔親集・公任集・定頼集・相模集・本院左大臣家歌合・陽成院歌合・陽成院「親王姫君達歌合・坊城右大臣殿歌合・宰相中将君達春秋歌合・内裏歌合 寛和二年・東宮學士義忠歌合・弘徽殿女御歌合長久二年・内裏歌合 承暦二年・若狭守通宗朝臣女子達歌合・左近權中将藤原宗通朝臣歌合・高陽院七番歌合・東塔東谷歌合（以上、新編国歌大観）

4 田和はこれを「形容動詞の連用形」とするが、本稿の調査の範囲では、「おほかた・に」が五四例あるのに対して、他の「活用形」は連体形一例（「なほ、世にある人のありさまを、おほかたなるやうにて聞きあつめ【源氏物語・末摘花】」と、語幹用法一例（「我がたちて着るこそうけれ夏衣おほかたとのみ見べき薄さを」【後撰集 卷十四・恋六・一〇五四】）しか見られない。院政期以前の段階では「おほかた・に」は連用副詞と規定した方が実情に即すように思うが、論旨には影響しない。

5 田和は中古の「おほかた」には「陳述副詞的用法はない」とし、次の例25のような例については「『おほかた』が助

詞ノを伴つて直接名詞句を連体修飾せず、間に形容詞が入ること、

「おほかた」の全体的な様子を表す意味により詳しい情報が付加され」た例だと説く。

25 うちつぎて、あななたはと見ゆるものは鼻なりけり。
〔略〕色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこやうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどしう長きなるべし。【源氏物語・末摘花】

次の例26「おほかたの人柄」のような「人の容姿や性質を表す「おほかた」の名詞としての用法と助詞ノを伴った連体修飾用法」が、ノを伴わない例27「おほかたの…御心ばへ」の如き例を派生させたと捉えるもので、「全体を表す副詞的な修飾用法への過渡期的な一用法」と位置づけられている。

26 …おほかたの人柄まめやかに、あだめきたるところなくおはすれば、…【源氏物語・少女】

27 おほかた、らうらうじくをかしき御心ばへを、思ひしことかなふと思す。【源氏物語・紅葉賀】

つまり「おほかた＋形容詞＋名詞」という構造が前提として保たれているのであって「おほかたの」が句全体と関わる段階には中古はいまだ至っていない、という主張だが、

次の点から従えない。まず、例28・29のような例も、「おほかた＋形容詞＋名詞」のような構成と考えるのは、文脈にそぐわない。

28 かの空蟬を、もののをりをりには、ねたう思し出づ。

〔略〕おほかた、なごりなきもの忘れをぞえしたまはざりける。

【源氏物語・末摘花】

29 おほかたさるまじき際の女官などまで、しのびきこえぬはなし。

【源氏物語・宿木】

まず「物忘れ／女官」などは田和のいう「人の容姿や性質」ではないし、「おほかたゆ」が「なごりなき／さるまじき」だけと関わりと考えるなら、「全体的な物忘れ／全体的に偲ぶ筋合いのない女官」などとねじれた解釈をとらざるを得ないからである。これらは「なごりなきもの忘れをぞえしたまはず／さるまじき際の女官などまで、しのびきこえぬはなし」全体と「おほかたゆ」が関わりっていると考える方が自然と考える。

6 例14について新全集が「一通りの悩み事でもあるというのだろうか」と訳し「皮肉なからかい」を読むのに本稿も従う。

7 「おほかた・の」が今回「四二例集められたのに対し」、「お

ほかた・なる」という語形は次の一例のみで、後世の「りんも大方なる生れ付き、茂右衛門め程なる男を、そもや持ちかねる事やある」【好色五人女・巻三】のような例（「そこそこの／まずまずの」という中間的評価を表す）はみられない。30は「特別な関係とは無縁な様」である。

30 なほ、世にある人のありさまを、おほかたなるやうにて聞きあつめ、耳とどめたまふ癖のつきたまへるを

： 【源氏物語・末摘花】

8 なお、中世に見られる31のような「全否定」の用法は、この「総合」が後に展開したものであろう。中古では次例32のように何かの不在を総合するという用法しかないが、「全否定」は総合しようのない一回的出来事に対して用いられ得るのが特徴である。

31 …鬼寄りて、「さは取るぞ」とて、ねぢて引くに、大方痛き事なし。

【宇治拾遺物語・巻第一・三 鬼に瘤取らるる事】

32 あしひきの山ほととぎすのみならずおほかた鳥の声も聞えず

【後拾遺集・巻第三・夏・一八二】

9 これを「さあ帰ろうよと言うのですが」工藤重矩（一九八三）とか、「さあ帰りましょう、と言いたところ

参考文献

です」(新潮集成)のように解するのは、「いざ…せむ」の語法として無理があるだろう。

10 ただ、事態に依然関わりを持つ「総合」とそれから離れ切る「前提の解消」が、叙法副詞の下位分類に収まっていたよいか等、副詞をどう組織するかという問題と密接な考察の余地が残される。

11 「その他」は次の三例。33・34は名詞といつてよいだろう。35は意味的には連用のそれであると考えられる。

33 …おほかたにつけては、いづれの皇女たちをも、よそに聞き放ちたてまつるべきにもあらねど、またかくとりわきて聞きおきたてまつりてむをば…

【源氏物語・若菜上】

34 六条院にも、おほかたにつけてだに、世にめやすき人のなくなるをば惜しみたまふ御心に、まして、これは…

【源氏物語・横笛】

35 我がたちて着るこそうけれ夏衣おほかたとのみ見ベき薄さを

【後撰集・卷十四・恋六・一〇五四】

12 この例は中古の用例ではないので前掲の〈表〉に計上していない。

工藤重矩(一九八三)『古今集』の「おほかたは」の解釈」『和歌文学研究』第四七号

工藤浩(二〇〇〇)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店

田和真紀子(二〇〇五)「中古和文資料における「おほかた」の用法―副詞化以前の用法に関する意味論的考察を中心に―」『都大論究』四二号

田和真紀子(二〇〇七)「おほよそ」「およそ」の意味・機能の史の変遷」『外国文学』五六号

(ほしの よしゆき)ノートルダム清心女子大学准教授)